

## 野球狂人生

長崎大学医学部教授、附属病院薬剤部長  
昭和33年卒業 市川 正孝

(薬局長百人選 IX (p.17) 薬事新報社 平成3年1月発行より)

昭和九年生まれは、終戦直後アメリカ軍の占領下にあって日本の教育制度が改革され、昭和二十二年小学校卒業と同時に義務教育として新制中学へ入学させられた第一号の年齢に当る。野球が死ぬほど好きで、長崎市立大浦中学校の三星手となり最強のチーム力を誇った。昭和二十四年、長崎県立東高等学校が西九州地区予選（長崎、佐賀、熊本県）で優勝し甲子園へ出場したのが憧れとなり、同校へ進学して硬式野球部へ入部した。幸い、一年次から三星手に抜擢され三年次は遊撃手となり、甲子園を目指して日夜練習に励んだ。先輩には申訳なかったが甲子園への夢は遠く、卒業時に実業団や私立大学からの勧誘もあったが、青春を野球に捧げ燃えつきた抜け殻みたいに一年間頭を冷やして浪人生活を営むことになってしまった。昭和二十九年に長崎大学薬学部へ入学、順調に卒業し、なぜか生化学に興味が湧き大学に残った。生涯野球を止めようと決意した根性はどこへやら野球狂いがまた始まり、長崎大学野球部の主戦投手に返り咲き、実業団チームとして九州各地を転戦した。昭和三十七年に熊本大学薬学部薬剤学教室助手として配置換したとき、やっと野球熱が冷めた。これは師事した一番ヶ瀬尚教授にお願いして行動を伴にしたことによるもので、薬剤部長を併任されたことによって、病院薬剤師に関心をもつききっかけにもなった。

昭和三十九年から四十一年にかけて九州大学薬学部薬品製造工学講座へ内地留学し、酸素異項環のクマリンとニトロフラン誘導体の合成化学分野を研究することとなり、恩師西海技東雄先生に主査をお願いして薬学博士論文を完成することができた（当時三十一才）。

一般家庭に食肉加工製品を保存する冷凍・冷蔵庫が普及しておらず、冷凍食品加工技術の開発が未熟であったため、保存料・食品添加物の研究が盛んで、西海技先生によってニトロフラン誘導体のAF-12がハム・ソーセージ、かまぼこ、豆腐などの保存料として開発された。当時、米国ウイスコンシン大学医学部臨床腫瘍学科のブライアン教授はニトロフラン系化合物の発癌性を研究しており、西海技先生を通じて化学物質の発癌性に関する研究のプロジェクト参加を要請してきた。

昭和四十六年、熊本大学薬学部薬品製造工学講座の助教授になって二年目のときであったが、留学の機会を得てウイスコンシン州マジソン市で生活することになった。

約二年間の研究生活を終えて帰国したが、その後六年を経過してウイスコンシン大学医学部がクリニカルサイエンスセンターとして医学教育、大学病院及び臨床癌センターを統合し新医療体制を組織化した際、臨床癌センターの人体腫瘍学科客員教授のポストに招請された。再度、アメリカで生活することになったが、長女が高等学校を卒業した年でウイスコンシン大学へ入学し、さらにエッジウッドカレッジにも席を置き、教育学を専攻して卒業、教員資格を取得した。これでアメリカの生活が定着できるよう思えたが、丁度九州大学薬学部長井口定男教授が福山大学に薬学部を創設する努力をされているときで、そのお手伝いをする機会を頂いた。

昭和五十七年薬学部創立とともに生物薬学科医薬品化学担当教授に就任し、医療薬学を指向した教育が開始された。まだ未完成の研究室、実習室、視聴覚教室、女子寮建設など、施工に追われる日々であったが、その間隙を縫って福山大学硬式野球部部長を引受け、主に経済学部や工学部で選手養成を行い、全国大学選手権へ向けて練習に励んだ。幸い、中国・四国地区で優勝し代表権を獲得して全国へ名を馳せること二度におよび、薬学部女子学生を応援のチアガールに仕立てて明治神宮球場へ出場したのは何よりの思い出である。

昭和六十年、福山大学薬学部設立が、まだ完成していない時に、長崎大学医学部・薬剤部教授設置の初代教授候補になってしまった。各方面に御迷惑をかけ、お詫びの気持ちで一杯だったが、現職に就任することが決定し、未練を残しながら福山大学を退職させていただいた（当時五十一才）。教授職の他に薬剤部長を併任すると、外国で研究することが大変不便になる。ウイスコンシン大学臨床癌センターの客員教授を引受け以来、福山大学時代も併任してきましたが、ウイスコンシン大学へ海外出張しなければならないが、三ヶ月未満に制限されました。切角の機会なので、長崎大学医学部附属病院薬剤部から薬剤師を招き、ウイスコンシン大学病院でクリニカルファーマシーの研修を三週間（有給休暇を使用）受けさせることにした。語学力に難点はあるが、用時助けることでトレーニングに耐え貴重な体験をしているようである。

九州・山口地区国立大学病院薬剤部対抗ソフトボール大会が毎年開催されているが、わが長崎大学病院薬剤部は優勝の経験がなかった。ここで、また野球狂いが目を覚まし、まずピッチャーを養成、打力チーム指導を行い、昭和六十年薬剤部長就任時から四年連続優勝の偉業を成し遂げた。

### 略歴

昭和三十三年三月	長崎大学薬学部卒業
昭和四十四年十月	熊本大学薬学部助教授
昭和五十七年四月	福山大学薬学部教授
昭和五十四年十一月	ウイスコンシン大学臨床癌センター客員教授併任
昭和六十年四月	長崎大学医学部教授・薬剤部長併任



写真上左より  
熊薬助手時代のソフトボール  
(1964)  
O B 戦・打者=市川 (1979)  
O B 戦・打者=市川 (1996)

下左より  
O B 戦・市川三塁手 (1979)  
O B 戦・市川投手 (1985)  
O B 戦・市川投手 (1996)

## 大同団結なる！

長崎大学薬学部野球部

部長 渡辺 三明（昭和42年卒）

（柏葉健児一背番号9— 昭和61年2月発行より）

春風心地よい、この頃です。同窓生の皆様には、ますますご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

昭和45年に一時中断していた野球部同窓会が復活し、さらに昭和48年より会誌柏葉健児が発行され、同窓生相互の絆をより強固にしてまいりました。この16年間の流れの中にあって、先輩後輩の信頼関係を築きつつも、常に、私達の先達への憧憬に似た『想い』が拡がっていたことも確かであります。昭和51年の背番号3から始まった、この私達の望みが60年度のOB会で一気にかなえられたことは大変嬉しいことありました。昨年11月のOB会には、森田稔、江頭文昭両先輩のご尽力により10人の野球部小野島会の大先輩を同じテーブルにお迎えでき、さらには、9年卒の野口繁一、11年卒の隈治人両先達をまじえ、現役部員を合わせ74人が親しく歓談し、痛飲したこと、実に愉快なひと時がありました。この時ほど、先輩後輩の年齢を超えた、『野球をしていた』『野球が好きだった』という共通項によって結びついた同窓会の気持ちの良さに、私達は野球部に籍をおいていた幸を感じたことはありませんでした。

さらに、この席で、本同窓会の目標であります、相互の信頼を培うこと、後輩部員への財政的援助の課題が持ち上がり、即座に小野島会より援助金の発案があり、本年1月17日に金31万円が野球部の基金として贈呈されましたこと、誠に有難く感謝いたしております。

大同団結なる！ この言葉のすがすがしい響きを、私達は大切にし、さらに部、同窓会の発展のために力を注ぐ決意であります。



OB戦（昭和60年）  
小野島時代の先輩と



写真左上 同窓会長、副会長のツーショット（1997年）、左下 平成8年のOB戦、試合前の記念撮影時のお二人、右 平成8年のOB戦のベンチ風景（左より市川、渡辺、西脇）

## まだ早すぎる

昭和25年卒業 古川 淳

「古川さん、打ってみる？」 40年程前の昭和町校舎の広いグラウンド。グローブのなかのボールを弄びながら生化学教室の市川助手はニコヤカナ顔をして言った。

「よーし、目が覚めるようなヒットを」と細腕をさすった。当時、私は薬化学教室の助手であり、はやりの薬学部ソフトボールチームの名？レフトであった。

そしてプレイ、速い内角球にのけぞった。曲がるわ、落ちるわ、ホップするやら、10球をすべて空振りしてしまった。

その後、市川先生は、熊本大学ついで福山大学へ転任され、研究、教育に専念された。その間にはアメリカ、ウィスコンシン大学臨床癌センターの客員教授として発癌機構について研究された。主な研究は、植物に広く分布しているクエルセチンのようなフラボノイド類の突然変異性をもつ化合物の化学構造と発癌性の関連性についてと聞いていた。

昭和60年、福山大学薬学部教授だった市川先生は医学部附属病院率剤部長に就任され

た。医学部の期待は勿論のこと、医療薬学を標榜し、大学院を充実したい薬学部にとっても得難い協力者であり、指導者であった。薬学の合成系の分野を専攻された市川先生にとつて薬剤部長職につくことは相当な決心が必要だったろうし、その職務を遂行することは大変なご苦労があったと想像された。しかし、持ち前のバイタリティーを駆使し、広い視野をもって薬剤部の運営に当たり、また医学部教授として医学部さらには大学の運営に関与されていた。一方では、病院薬剤師会そして県薬剤師会の魅力ある指導者として活躍されていたのは衆知のことである。

昨年、市川先生は日本病院薬剤師会賞を受賞された。そのお祝いの席で私は先生のご活躍に心からの祝意を述べた。

それから、日ならずして先生の入院を知らされた。闘病も一時は順調に回復の方向だと聞いて安心していた。

1月8日、告別式で弔辞を捧げられた全田浩日病薬会長は、悲痛な面持ちで

『市川先生！あまりにも早いよ』

と絶句された。この言葉は、私のみならず参会した多くの人々の心に深く残されていることだろう。

平成12年9月

### まだ信じられない

昭和25年卒業 古川 淳

ようやく、秋風の到来、さわやかな日々が続くようになった。この時期になると薬学部に在籍していた昔の事などあれこれと思い出すこともある。学会の準備、教室旅行の温泉巡り、そして野球部OB会などなど。そこには、いつもにこやかな表情でかつ、積極的に事に対処する渡辺先生（三明さんと呼んだほうが親しみやすい）の姿があった。おもえば三明さんは長い付き合いであった。その流れのなかで、何という運命のいたずらだろう、2月25日明け方の悲報は、まさに晴天の霹靂、信じたくない、知りたくない知らせであった。

三明さんは、学生時代、野球部は勿論のことワンダーフォーゲル部にも属していた。おそらく彼がリーダーだったろう、薬学部の長崎一雲仙夜行軍はしんどいものだった。昭和40年代前半は、全国各地の大学で激しい学園紛争が巻き起こり、その頂点に立った事件が東大安田講堂の攻防戦だった。長崎大学も例にもれず火炎瓶が飛び交い、教養部などの封鎖が続いた。大学内にあっても学生間あるいは学生一教職員の間に相互不信の暗雲が漂い殺伐とした雰囲気であった。このような異常な状態を少しでも解消し、学部内の人間的な触れ合いを取り戻そうと始められたのが、薬学部合宿研修であった。

この研修は昭和46年（1971年）より、平成2年（1990年）まで20年間、学部最大のイベントとして続けられた。そして研修に参加した多くの学生諸君には様々な思い出を提供したであろう。長い期間、中心になってこの研修を企画し、指導し、実行したのは三明さんであり、三明さんなしには合宿研修は語れない。



写真上 平成6年野球部OB会懇親会、写真下 同懇親会翌日の親睦試合前の記念撮影

一方、野球部同窓会の復活、秋のOB一現役戦、野球部同窓会報『柏葉健児』の発行など、すべてに中心的役割を果たし、精力的に事を運ぶ裁量は見事であった。

とくに『枯葉健児』の発行にあたっては、薬専小野島時代の先輩にも声をかけ、老骨に鞭を打たせ、貴重な懐古の寄稿文が掲載された。これを読んだ多くの先輩方より感謝の気持ちが届けられたのは何より嬉しいことだった。

三明さんは、学位を得てから、カナダ、ウォータールー大学のスニーカス教授の研究室に留学し、当時、新しい合成手法のリチエーション（リチウム化）反応を改良、応用して、多くの天然化合物の合成に成功して、学会から大いに注目されていた。常日頃、三明さんは、野球以上に研究の厳しさを教えて学生の研究、指導に対処していた。私にとっても大いに見習うべきことであった。留学先であったスニーカス教授は、三明さんの突然の訃報に驚き、その死去を心から悼み、佳子夫人宛て丁重な弔辞が寄せられた。

私たち長薬同窓会員としては、1月6日、会長の市川先生を失い、14日には、元会長の伊藤好古先生、そして、2月25日には副会長の三明先生をたて続けに失うことになった。こんなことがあるだろうかと世の無常を強く思い知られ、いまだ信じられない日々である。

平成12年9月 記

## お二人の想い出

昭和30年卒業 山戸 寿

市川正孝先生とは平成7年1月菊谷元資先生の叙勲祝賀会の席上でお会いしたのが初めてでした。

渡辺三明先生とは昭和50年頃社用で長崎に出張した際、教室にお邪魔して野球部の年会費をお渡ししたのが初めてでした。

両先生とはその後、長薬同窓会総会や近畿支部総会などの薬学部の近況をお聴かせ頂いたり、懇談したりしました。特に昨年大阪での総会後の二次会・野球部同窓会では大いに盛り上がり、両先生ともお元気だったのに急逝されたこと信じられず断腸の思いです。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

## 故市川正孝教授との想い出

昭和31年卒業 佐世保市 今泉 貴世志

謹んで故市川正孝先生の靈に哀悼の辞をささげます。

長薬野球部同窓会にとっても本当に惜しい人を亡くしました。

平成11年9月4日の午前中「市川先生が入院されました。然もむつかしい病気の様ですよ」との電話を貰い驚き、すぐに大学病院の薬剤部へ電話をしましたが、未だはっきりした事は分からぬとの返事で非常に心配したものです。9月14日に病院を訪れましたが面会謝絶との事で逢えず佐々木・小笠原両副薬剤部長より、入院以来の毎日毎日の病状と治療の経過をくわしく説明受けました。今の医療の最高の療法をされたと思いますが10月・11月と大分快方に向かわれ、今年の3月19日には退官記念パーティまで企画されていた様ですが、それも中止になり誠に残念です。あまりにも早かったと思います。

私と市川君との出逢いは45年前、昭和30年4月にさか昇ります。長大薬学部野球部に私が4年生、市川君が2年生の時で大村の教養部を2年過ごして本学部へは入ってきた時です。長崎東高校が甲子園へ挑戦した時の素晴らしい内野手が今度薬学部へ入学したと云う噂は長崎の本学部においても伝わってきました。後から決勝戦で敗れて甲子園へ



学生時代 合成の教室 昭和32年?倉石助教授をはさんで実習中  
今泉卒後2年目で学校でぶらぶらしていた時お邪魔する。市川君、  
角田正之君、西脇金一郎君、恒見昭男君

はあと一步だったのが眞実の様ですが、その素質と技量は超一流でした。お蔭で4年生の私はそれ迄ショートをしていましたがショートのポジションをゆずり、ピッチャーしたり、ファーストをしたりの有様でした。佐賀県薬会長の江口さんの後のポストをやっと確保したとこでしたのに。熊本大学薬学部との定期戦や長崎大学の学部対抗戦のために、当時の私は昼の明るいうちには有機合成や薬学の追求よりも、野球オンリーの学生生活だったと想い出されます。昭和31年に卒業しても、もう少し勉強をしなさいと当時の高取治輔教授の御自宅に居候させられて、研修生として一年半ばかり学校にお世話になりましたが、市川君や九葉の元常務だった西脇金一郎君やシオノギ福岡支店学術部長だった角田正之君達が真面目に分析や合成の実験をしているのを呼び出して、グラウンドでフリーバッティングをしたものです。彼等もよく私につきあってくれたものです。

夜は夜で昼間汗をかいしているのでアルコールのピッチがあがり、連日連夜、銅座、観光通り、ハーモニカ横丁とくり出したものです。今はあまり名前を聞きませんが、50円のハイボールの全盛時代で、サントリーバーとトリスバー(ウミノ)の二軒位しかなく、後は女性がいるサロンとキャバレー銀馬車位でした。2時、3時が当たり前で翌日は私はゆっくり良かったが、彼等は講義があるので大変だったと思います。すまぬ事をしたと後悔しました。

市川君はそれから卒業後、一番ヶ瀬教授の下で熊本大学薬学部、ウイスコンシン大学、福山大学と我々とブランクがありますが15、6年前長崎大医学部教授として戻ってきてから又付き合いが始まりました。早速、長薬野球部OB会にも出席するし、当然、長崎で佐世保でと夜のつき合いも復活しました。佐世保でソフトボールのチームを私の会社の男子連中と作って呼んだり、電話をかければ心よく引き受けて出席して呉れました。当然、其の夜は2次会、3次会とクラブめぐりです。佐世保の美人のママさんにも人気があり、連れて行った私は影がうすかった様です。



日本病院薬学賞受賞祝賀会 1999年7月31日  
市川御夫妻、渡辺三明先生とともに (ニュー長崎ホテル)

ソフトボールばかりでなく、私の会社の薬剤師の皆さんにも時々佐世保に呼んで、長大病院の院外処方箋発行の影響や薬剤師の職能向上の講義等をして貰いました。思えば昨年のお盆の直前の8月10日に高木会長・西脇野球部同窓会長・渡辺三明助教授らと共に招きして今泉調剤薬局の薬剤師全員と一席もつたのが元気な彼の姿を見たのが最後でした。其の時もいつもど何の変わりもなく呑んで食べて

10人ばかりで2次会のクラブへとくり出しました。12時近くになって私だけ帰ると言つ

たら、めずらしく一緒に帰ると言うので西脇君と2人をホテルへ送りました。10年位前、長崎で呑んだ時、12時頃ホテルへ帰ると言ったら、昔、学生時代、2時3時迄ひっぱつて帰さなかっただけにもう帰るとはなんですかと帰さなかっただ事がありますが、其の時は素直についてきました。今、思えばやっぱり何か異常があったのではないかと悔やみます。翌朝、私の店に挨拶と言って寄ってくれたのが、あの顔色の赤い笑顔が素晴らしい、誰からも愛され、尊敬された市川君の最後の顔でした。長崎県内の何所の薬局でもそうでしょうが、薬剤師不足で困り果て、悩んで頼んだ時も数名の薬剤師を世話して勤務の便宜をはかってくれたし、私の頼み事はよく聞いてくれました。改めて今、感謝の念で一杯です。



野球部同窓会 92年11月14日 浦上江山樓  
左端は江本篤君（昭和31年卒）

大阪地区長葉野球部同窓会 1999年10月23日  
摺南大学薬学部小井田教授、三明さんとともに  
大阪新田辺 友栄にて

やっと面会が出来ると聞き 11月21日に大学病院の病室を訪れ、奥様と3人で30分ばかり話し合い、その時、快方に向かい一つあるとの事で退官記念パーティーの事などを話し合い、又バッヂリ呑もうやと言って帰った事でした。その1週間後位に何か急変した様な連絡をうけ心配しておりましたが、最悪の結果となりました。これからもっともっと元気で長崎県薬剤師会、病院薬剤師会、長葉同窓会、長葉野球部同窓会の為に指導的立場で活躍して貰いたいと思っておりましたが果たせぬ残念の一事です。お残りになられました奥様の則子様や三人の立派に成長されましたお子様達が心落とす事なく幸せにお暮らしになる事を祈りたいと思います。

合掌

（本稿は長崎県薬剤師会雑誌「県薬だより」2000年3月号に掲載されたものです）

## お世話になった両先生

昭和32年卒業 長田 雅子

「うちに寄越していいよ」病葉の理事会で市川先生にこう言われたのは、15年ばかり前のことでした。そのころ私が勤務していた病院は総合病院ではなく、そのため新卒薬剤師の研修ができなかったのでご相談したところ、快く引き受けてくださったのでした。そ

れ以来、新卒薬剤師を採用する度毎に大学病院薬剤部にお世話になってきました。

エネルギー満々で行動力に溢れ、弁舌さわやか、堂々たる体躯、大学病院薬剤部長という押しも押されもしない先生でしたが、高校では同級生、大学では私の一年下ということもあって、気軽に相談できたのですが、とても良くしてくださいました。長崎東高野球部の名ショート時代のスリムでおとなしそうだった頃からは想像もできませんでした。

そして、その新卒薬剤師を送り込んでくださったのが渡辺三明先生でした。地元ということで、ずっと同窓会の役員を務めさせていただいている関係で存じ上げていた三明先生でしたが、長大薬学部創立百周年の際に『薬学部百周年史』の編集委員としていっしょに仕事をしたり、佳子夫人との関係もあって、親しくなりました。そしてなにかにつけて親身になってお世話をくださいました。求人をお願いすると、「いるよ。とっても光っている良い子がいるよ」と、あの人懐っこい声で、お返事をくださったり、本人を車で連れてきてくださったりされました。（もしかすると、その学生には強引に承諾させたのかも知れませんが…）学生や、いろいろな人の面倒見がよく、本当にいっしょにうけめいお世話をされておられました。

三明先生の運転で、佳子夫人や友人たちと外海町へ「うに」や「活いか」を食べに行つたのは昨年の春のことでした。帰りには、遠藤周作の”沈黙の碑”や、出津の教会などを廻って、ほんとうに楽しい一日でした。そしてまた今年も一緒にしたいものと楽しみにしていましたのに。今でも信じられない気持ちです。

市川先生も三明先生も皆より早くこの世を去ってしまいましたが、きっとその分、十分に仕事をし、楽しいお酒を飲み、大勢の人のために活躍し、完全燃焼されたのではないでしょうか。沢山のすばらしい想い出を私たちの胸に残して、今はきっとあの世で二人、大好きなお酒を飲みながら、談笑していらっしゃることと思っています。



熊葉遠征・女性マネージャー初登場  
(昭和30年?)  
写真提供：工藤二郎（昭和33年卒）